

ルド調査（文筆家 鈴木涼美）の視点からの報告があった。各報告の要旨は [https://jsssociology.org/meeting\\_archives/2019030892\\_1/](https://jsssociology.org/meeting_archives/2019030892_1/) で閲覧できる。（釜野さおり 記）

## G20岡山保健大臣会合開催記念国際シンポジウム「持続可能な高齢化社会・経済のためのライフ・サイクル・アプローチ」

10月18日、G20岡山保健大臣会合開催記念事業として国際シンポジウム「持続可能な高齢化社会・経済のためのライフ・サイクル・アプローチ」が岡山大学創立五十周年記念館にて開催された。G20保健大臣会合参加国からの有識者、研究者、学生など約220人が参加した。

「一人ひとりが若いうちから心身ともに健康な生活を送ることで健康寿命の延伸に繋げる」という考え方であるライフ・サイクル・アプローチに関する日本の事例を紹介し、健康でアクティブな高齢者が増えることによる経済への正の影響についてG20参加国の事例をもとに報告が行われた。筆者はTheory for Life-Cycle Approach and its Examples from Japanと題するセッションで、“Changes in family/gender policy in Japan and fertility rate”というタイトルで報告を行い、近年における日本の家族・労働政策と出生力との関連について解説した。また、各事例報告の後には、パネルディスカッションが行われ、アジア6カ国における高齢化社会への取り組みが紹介された。大会のプログラムは以下のURLから閲覧することができる。

[https://www.okayama-u.ac.jp/upload\\_files/event/G20SideEventProgram\\_Final.pdf](https://www.okayama-u.ac.jp/upload_files/event/G20SideEventProgram_Final.pdf)

本イベントは、国連人口基金（UNFPA）アジア太平洋地域事務所、外務省、世界保健機関（WHO）、ASEM Global Ageing Center、European Observatory on Health Systems and Policies、日本老年学的評価研究機構（JAGES）との共催で行われた。本シンポジウムでの報告にあたり、UNFPAアジア太平洋地域事務所・人口高齢化と持続可能な開発に関する地域アドバイザー 森臨太郎氏にお世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。（福田節也 記）

## 国際人口学会学術パネル：東アジアと南欧における家族行動「東アジアと南欧における家族変動についてのワークショップ」

10月25-26日、「東アジアと南欧における家族変動についてのワークショップ（Workshop on Family Change in East Asia and Southern Europe）」がアメリカ・ケンブリッジのハーバード人口・開発研究センターにおいて開催された。同ワークショップは、国際人口学会学術パネル「東アジアと南欧における家族行動（Family Behaviour in East Asia and Southern Europe）」（代表：James M. Raymo プリンストン大学社会学部教授）における活動の一環であり、ハーバード大学ライシャワー日本研究所所長のMary C. Brinton教授らのホストにより開催された。東アジアと南欧諸国は「強い家族（strong family ties）」と低出生力という一見共通する特徴をもち、それぞれの地域において低出生のメカニズムに関する独自の分析がなされてきた。しかし、両地域における少子化現象には、どのような共通点と相違点があるのかは必ずしも明らかではない。本パネルでは、国際比較研究の枠組みから、この課題に取り組み、少子化問題の理解と解決に向けた糸口を探ることを目的としている。今回のワークショップは、同パネルの運営委員らによる方針会議を兼ねたものであり、イタリア、スペイン、中国、日本そしてアメリカから19名の研究者が集まり、これにハーバード大学の大学院生ならびにポスドク研究者数名が参加した。ワークショップでは、まず各国における状況を